

# 人間、この選択操作するもの

社会人類学におけるネットワーク・アプローチ（一九五〇・六〇年代）

前 山 隆

## 現代複合社会研究と人類学の変貌

文明社会とは国家の存在する社会をいう。「文明 civilization」を規定するもつとも根源的な原理は国家である。未開社会、部族社会、複合社会、産業社会、文明社会等々の概念が慣用されるが、人間社会を大きく二つに類別するには「国家社会 state society」と「無国家社会 stateless society」とするのがもつとも理論的に整合性があると私は考える。社会人類学・文化人類学（以下単に「人類学」と呼ぶ）においては長い間未開社会あるいは部族社会、それに対して文明社会、複合社会といった概念が用いられてきたが、この両者を明別するもつとも根源的原理は国家の在・不在にあり、国家は階級構造のうえに成立する。複合社会の複合性 complexity を規定するものは階級構造とそのうえに成立した国家である。以下しばしば複合社会、部族社会という語を私も用いるが、それらは国家社会、無国家社会というのとはほぼ同義とここでは理解してもらいたい。

人類学的研究は一九六〇年代に入ってから急速に産業都市社会に関心を向けてきた。もともと人類学でもそれ以前からおおくの先駆

的研究が現代複合社会において実施されてきてはいたが、大勢として人類学者の関心が国家と都市の社会、欧米やアジアの現代社会、発展途上国における植民地主義とポスト植民地主義の研究に向かい、自らの理論装置と研究法の根源的再考と本格的に取り組み始めたのはその時期であつた。一九五〇年代末までは「都市人類学」という語は自家撞着的である、なぜなら人類学は未開社会、部族社会の研究だから、と言われもしていた。

しかし一九六〇年代の人類学ではレヴィ・ストロース流の人間思考のメタ・ストラクチャーを追求する構造主義やヴィクター・ターナー等の強い影響下に儀礼や神話、シンボリズムの研究が大きな潮流となり、都市人類学や現代産業社会、植民地主義の研究はなかなか大きな流れとはならなかった。したがって一九六〇年代でも社会学が現代産業社会をやり、人類学者が部族社会を研究するという二大分裂、事実上の縄張りの分業が大きく崩れてきたということではなかった。

しかし人類学と社会学とをその研究領域においてこのように二つ

に分裂させる理論的根拠というものはなにもなかった。都市化と産業化が世界の隅々で急激に進行し、それにしたがって人類学者の都市化も進んだとも言われるが、私はむしろ人類学者達は部族社会研究における人類学的思考と理論の自閉症的行詰りからの突破口を求める足掻きのなかから現代複合社会に研究領域を探し求めて行ったという視角から考察を進めるのが有効だと考える。たしかに一九六〇年代は、一九二〇年代、三〇年代の分節社会中心のリニッジと親族研究に基礎をおいた人類学的構造機能分析が着実な展開をその後五〇年代まで示してきたものが理論的再考、再構築の段階に入り、激動の時期であった。都市人類学という語で総称される研究動向はその一方の大きな展開であり、その力点の置き方において同時期のもう一方の大潮流をなした構造主義、象徴人類学的展開とは重なる部分を多くもちながらも異質な方向性をもったものであったと言える。

一九六〇年代に都市研究に入って行った人類学者はみなそれまでの部族社会の人類学の遺産を大きく継承していた。だが彼等は無国家社会研究のそのままの延長として国家社会の人類学的研究を推進できたはずはなく、新しいパラダイムと研究法を模索するなかで多くの「社会的」概念装置、すなわち現代複合社会研究のなかで社会学者達が長年にわたって構築してきた理論や鍵概念の一部を借用し、あるいは自らの研究装置の中核的部分へ採り込むものも多かった。したがって社会学者達が時にこのような人類学者の都市への進出を評して、いくぶん嘲笑的に、「人類学者は産業都市社会の

状況に直面して、これまでの研究装備をすべて始めからやり直さなければならぬのだ」と言っていたのもあながち不思議なことではない。

もしこのような社会学者達の評が正しく、部族社会研究のなかで長年構築してきた「人類学的」理論や概念装置が現代の産業都市社会研究においては適合しないとしたならば、これまでの社会人類学・文化人類学の人間研究はその根源において一大誤謬であったと言わねばならないのだろうか。われわれは少くとも都市人類学者達がごく部分的にしか「社会学者化」していないことを十分に承知している。では産業都市社会の研究、あるいは研究者自身の属する「自文化」の研究において、社会学者の研究法と人類学者のアプローチになにか根源的で、決定的な差異というものがあるのだろうか。それが一九六〇年代における議論のなかでどのように了解されていたのだろうか。少くともそれが単に社会学者は数理統計的方法を用いるとか、質問紙法を用いる、人類学者は参与観察法に基く集中的事例研究を実施するといっただけの相違ではなしに、より根源的な理論的枠組において両者を明別すべき差異があるはずである。

私はこの小論において右の設問への吟味を広く概括的に扱うつもりはない。都市研究を推進する人類学者の一部の間で採用されているアプローチのある局面が、人類学者が部族社会の解釈に際して使用される方法や理論装置とどのように異なるかについて少しばかり検討してみるつもりである。

## ネットワーク・アプローチと構造機能分析

社会人類学における社会的ネットワーク研究法は、「部族人類学」<sup>トランスバール</sup>の構築してきた概念装置やアプローチを複合社会、都市状況のコンテキストでその適合性をテストし、その状況解釈に有効な装置に再構築し、あるいは適応させることを第一義的な目的として案出されてきたものである。換言すれば、この研究法は部族人類学の研究枠組の中核を構成していたそれまでの構造機能分析 structural-functional analysis のもつある種の不備・非適合性を超克することを主要な使命としていたといえることができる。ネットワーク研究法の主要な推進者のひとりであるクライド・ミツチエルはその一九六九年の総論的エッセイで、ネットワーク研究法は「従来の社会学的、人類学的分析枠組への補強策であつて、それらに置換されるべきものではない」(Mitchell 1969: 8)と述べている。ミツチエルのみならず、人類学におけるこの時期のネットワーク研究者のほとんどはこの研究枠組によつて人類学研究そのものの全体的な「革命」を意図していたわけではなく、どうやら「部分的革新」を目標としていたと言つことができよう。にもかかわらず、彼らが推進していたこの種の研究法の産み出す様々な問題点や疑義は諸局面において多くのラディカルな、破局的な効果をもたらし、より総体的な、理論装置の根源的な再考をも迫る意味を担つたものであつたはずだと私は当時解釈していた。その破壊的なインパクトのなから何が出てくるか、それとも何も出て来はしないのか、そのことに關しては採算ある見通しは立たなかつたにしても、その研究法の提起する問題

点はそのような性格のものだと私は理解していた。すくなくともネットワーク研究枠組が構造機能分析の屋台骨を根本から揺がすものであるとするならば、その提起する疑義は人類学の擁する理論装置に關して単に「部分的革新」に留まらず、全体的「革命」にも達しうる勢いをももちうるのではあるまいかという予感を感じさせるような議論を内蔵していると私は考えていた。

研究者によつてその人類学モデルの再吟味の仕方は大きく異なつていた。ある研究者は構造機能分析によつて代表される「アフリカ・モデル」はニューギニア高地の部族社会の研究法としては有効性をもたないと発言していた(Barnes 1962: 59)。このコメントを出したバーンズはアフリカ社会の研究者である。ニューギニア高地民では妥当性を欠くという発言は、構造機能分析のアフリカにおける「正しさ」をすこしも否定してはいない。また他の研究者は、都市研究は必然的に新しいアプローチに依らなければならない、なぜならば「都市の社会制度は農村の社会制度が変化したものではないからである」と主張していた(Mitchell 1969: 48)。またその研究者は、都市や多元社会<sup>マルチソサエティ</sup>は部族社会構造の変形したものでもないからだとも付言している。マックス・グラックマンは、「都市における部族主義に關するわれわれの分析の出発点は、その現象が部族民達<sup>トランスバール</sup>によつて現出されたものだといふ点にあるのではなく、それは都市居住者<sup>タウンスマン</sup>によつて現出されたものだといふ点にある。都市の鉱山で就労するために出身地の農村から出て来たばかりのアフリカ人は本来第一義的に鉱夫なのである(そしておそらく他のいかなる地域

における鉦夫にも酷似している、そして彼は第二義的にのみ部族民なのである。そして彼が部族主義<sup>トライバリズム</sup>を遵守するならば、それは都市のコンテキストから解釈されなければならない」と述べている (Gluckman 1961: 68-69)。

以上の主張をよく検討すれば、それらが、構造機能分析は農村・部族領域における研究方法としては妥当であるとする従来からの大前提と必ずしも矛盾するものではないということが分かる。さらに他の研究者のなかには、従来の人類学的モデルの不適合性を急激な社会変動から解釈するものもあった。そこにおける論では、従来の伝統的研究法はこれまでは正しかった、が現在のラディカルな社会変化の結果、新しいアプローチが要請されているとするものである。

さてここにひとつの注目すべきユニークな事例研究がある。それはアフリカのある農村・部族社会の解釈において構造機能分析が有効性をもつことができず、完全に挫折したとするものである。それはヴァン・ヴェルセンによる中央アフリカのトンガ族研究<sup>コンゴネス</sup>である。これはしかし彼の説明によると、トンガ族の「特異性」のためだといふ。この部族の研究データを基礎にしてヴァン・ヴェルセンは「状況分析 situational analysis」という方法を定式化し、そこで彼は人類学的分析のなかへ組織的に「変異 variations」と「個人的選択 individual choice」という概念を導入した。彼の論によれば、この状況分析法はネットワーク・アプローチに大変近似した方法で、「非構造化社会 unstructured societies」の解釈に際して格別<sup>ト</sup>に有効性を発揮するが、「明確に構造化された社会」の研究にはあまり役

に立たない、とした (van Velsen 1964: xxvii)。この論述は格別に注目に値する。伝統的構造機能分析モデルの挫折する社会は「非構造化社会」と分類され、すくなくともアフリカにおいては例外的、特異な社会であると了解されたのである。

以上見てきたように、状況分析法をも含めてネットワーク・アプローチの推進者達<sup>ト</sup>は一方では従来の人類学的モデルのかなり根源的な再吟味を実践しながら、他方では同時にこれらの新しい模索の試みを一般理論に読み替えることに大きな逡巡を示している。又アー族やタレンシ族は、例えば、なお彼等にとっては「聖地」でありつづけていたのである。ここまでの議論で少くとも明確に言えることは、この時点でのネットワーク・アプローチというものはいくつかの新しく重要な、補足的な視点を付加した、構造機能アプローチの修正されたヴァージョンであつたということである。しかし私の一九七〇年の時点での期待と了解では、ネットワーク研究法の射程距離はもつと遙か遠くまであつたのではなかったかということである。当時誰しも、そして私自身も、人類学者で構造機能分析を完全否定できるものはいない、それはできることではない、という明確な了解をもっていた。と同時に、もし理論と方法の本格的な革新を目指すのであれば、なによりもまず構造機能分析との対決とその再考、さらに言えば参与観察法との対決とその再考が肝要である、という了解もまた極めて歴然としたものであつた。そしてその対決と突破口の可能性を顕示し始めていたのがネットワーク研究の具体的調査結果とそこで展開されていた議論であつた。だが、一九

七〇年の時点までのネットワーク研究の提出していた理論的、概念的枠組はまだ混沌として、整理がついてはいなかった。ことにそれはこの研究法の驍將のひとりであったミツチエルの理論的一般論においてそれが目立っていた。私はむしろネットワーク論と構造機能論との正面衝突や乱戦模様を大いに期待していたのであったが、それらはきわめて散発的で、小競り合いの域をなかなか超えるものとはならなかった。

## 個人・集団・ネットワーク

現代人類学におけるネットワーク研究の出発点となるものは一九五四年に発表されたJ・A・バーンズの論文である。今日ではすでに古典といえるようなものだが、長い間高い評価を受けてきている(Barnes 1969: 3958)。バーンズはグラックマンの影響下にアフリカの部族社会研究を果たした後、ヨーロッパの現代複合社会、すなわち西ノルウェイにあるブレイムズと呼ばれるある教区パルシユにおける小さな、漁業、農業、工業を営む共同体でフィールドワークを実施し、この論文を書いた。そして彼はここでの現地調査に際し、彼がそれまで学習もし、アフリカ研究においても用いていた人類学研究における「アフリカ・モデル」を適用することに大きな無理を体験した。彼はブレイムズの共同体の「社会体系」ソシヤルシステムを構成している三種の「社会分域 social fields」を次のように明別した。

### 一、地域に基礎を置く社会分域

これは主として教区、村落等といった地域自治体や行政区

等によって構成されている。

### 二、産業体系によって創出される社会分域

これを代表するのは企業や工場、漁業組合、農業団体等である。

### 三、階級システム

これは主として親族、友人、近隣の関係から構成されている。

バーンズはこの第三の社会分域を「ネットワーク」と呼んだ。

バーンズはこのブレイムズ共同体研究において、特に第三の社会分域、すなわち階級システムに力点を置いて調査し、その本質を社会的ネットワークと捉えた。彼はこのノルウェイの小地方都市の社会体系のなかに、リニツジリニツジ(単系親族出自集団)や分節組織といった種類の社会集団(これらは人類学における「アフリカ・モデル」の中核をなすもので、その構造機能分析の主要な研究対象)を見出すことはできなかった。社会的ネットワークは集団間関係グループ・トゥ・グループ関係であるよりは個人間関係である。ネットワークは持続する、「協働的社会集団 corporate social group」<sup>(1)</sup>を形成はしない。ネットワークには社会単位はなく、境界もなく、明確な構成員、メンバーシップというものもない。それは自己中心的、行為者中心志向的(actor-oriented)紐帯である。

バーンズ自身の論述を見よう。

「われわれは皆熟知しているように、共系親族関係それ自体では

持続的な社会集団を析出させるわけではない。例えば私は私のイトコを幾人かもっていて、時には皆で共に協働して何かをやるということがないではない。だがそのイトコ達はそれぞれに自分自身のイトコをもっていて、彼等は私のイトコではない、そのように無限にどこまでも繋がっていく。各個人はそれぞれ自分自身のワンセットの共系親族を創出するが、一般的に言って彼および彼のキョーダイが創出する親族セットは他のいかなるものが創出する親族セットとも同一ではない。一人の個人は言うならば大勢の他の人々と関係をもっているが、その人々のなかには幾人かは直接に相互に関係していても、他のものらはそのような関係はもっていない。同様に一人の個人は大勢の友人をもっているが、その友人達はそれぞれに別に自分自身の友人達をもっているのである。もとよりその友人達のなかには相互に知合いもいるわけだが、その他の人々はお互いまったく知らない仲である。私は、この種の社会分域の在り方をネットワークと呼ぶのが極めて有効だと考える。」(Barnes 1954: 43)

各個人は自分自身のネットワークを築き上げるが、誰も特定のワンセットのネットワークのなかに生まれてくるわけではない。各人には自分の関心と構造的連関にしたがって個人的選択を採るいくつかのオルタナティブな方策が開かれているのである。つまりかなりの程度は各個人は自分自身のネットワークの「構築主体」、作者である。関心が移れば、彼のネットワークも変化する。彼が死亡すれば、彼のネットワークも消滅する。彼のもつネットワークは、獲

得された、境界のない、自己中心的な人間関係のワンセットである。また各個人は様々な社会集団にも関係している。それらの社会集団は他の二種の社会分域の部分を構成し、各個人は多くの集団に多様に、多面的に関わる。

以上の記述と対照的なものとしてエヴァンス・プリチャードの研究したヌアー族を見てみよう。ヌアー族の間では個人はリニジとか分節サブメントといった持続する社会集団のなかに生まれてくる。その集団は彼の関心や利害に基づいて彼自身が個人的に取捨選択し、獲得したものではない。集団はもとより自己(個人)中心的なものではなく、集団の存在はその一人の個人の存否に全的に依存しているわけではない。ある特定の集団、例えばリニジAのメンバーは他の集団、すなわちリニジBやリニジCには所属しない。すなわちヌアー族の形成するのは分節社会である。エヴァンス・プリチャードの研究関心は「集団」にあつて、「個人」にはない。集団間関係インターグループにあつて、個人間関係イントラグループにはない。構造的規制、構造の自己顕現にあつて、個人的選択にはない。

構造機能主義者エヴァンス・プリチャードは説く。

「社会構造とは、高度の斉合性と持続性を有する集団間関係のことである。集団は、ある特定の時点においてどのような具体的な個人々がその構成員であつたかには関わりなく同質性を保持し、その結果人々は世代から世代へとその集団をくぐり抜けていく。人々は集団のなかに生まれてきて、あるいは誕生後その集団に加

持続する「中略」。構造とは、諸集団の構成する体系内における人々の所属する集団と集団との関係のことである。」(Evans-Pritchard 1940: 262)

エヴァンス＝プリチャードはさらに付言する。

「地域共同体(それらの間の諸関係が政治構造を構成しているのであるが)はその成員である個々人の間に築かれている数多くの多様な関係があるからこそ集団となっているのである。ではあるが、ここでの議論のわれわれの関心事はあくまでもそれらの多様な諸関係が体系内で相互にある種の関係を保持する集団という形に組織化されているということにあるのであり、われわれがそのような諸関係を研究するのもそのような組織化された形においてだけである。それはあたかも、何等かの目的のために、人が肉体の諸器官を構成している細胞間の諸関係を特に取り上げて研究することなしに諸器官の間の関係を研究するのと同じことである。」

(Evans-Pritchard 1940: 265)

この議論において構造機能主義者の代表であるエヴァンス＝プリチャードは個人と生物学的細胞とをアナロジーにおいてひとつに括り、社会的集団と生物体の器官とを他にまとめ、類似したものとして論じている。彼は、その人類学的研究の対象として、人間関係の行為主体としての個人自体には関心がなく、「これらの人間関係がいかに集団に組織化されているか」という点に集中的に関心を注いでいる。これはいかにも社会科学におけるデュルケム伝統の顛れである。これに反して、バーンズがネットワーク・アプローチを推

進するとき、すくなくともノルウェイ地方都市やニューギニア高地人のコンテキストに関わるかぎり、個人中心志向の関係をそれ自体として研究調査することが極めて有益であり、かつ不可欠なことであり、それはひとえに「これらの人間関係が集団に組織化される」ということが欠除しているか、あるいはそれが相対的に重要性を欠いていると認められたからなのである。バーンズは、社会的ネットワークは構成単位をもたず、境界がなく、調整統御主体としての組織体を欠くと説いている(Barnes 1954: 43)。エヴァンス＝プリチャードにとつては、「人々の社会構造というものは分離しているが、同時に相互に深く関係し合っている構造と構造との織りなす体系なのである」(Evans-Pritchard 1940: 263)。バーンズにとつては、分析にとつて肝要なのは「ネットワークであり、それはワンセットの点群であり、その点のいくつかは線で連繋されている。」(Barnes 1954: 43)

バーンズの解説を見よ。

「このネットワークは国内全体を駆け巡る。教区の境界で途切れてしまっわけではない。ネットワークはブルームズの住民を他の多くの教区に居住する縁者や友人達と結びつけ、あるいは同一教区内の縁者や友人達と連繋させる。この種のネットワークには外縁上の境界(終点)というものはなく、また内部がいくつかの部分に分離しているということもない。なぜならそれぞれの個人は自分自身を友人の集合体の中核に位置づけて了解しているからである。」(Barnes 1954: 43)

このようにネットワークを構成している点は主として個人であつて、「分離しているが、同時に相互に深く関係し合っている構造」ではない。ではあるが、バーンズはすべてのネットワークが自己中心ego-centricののだと言っていない。が、彼はその後の理論的論考において「われわれは準拠点としてある特定の個人に特に集中的に注目し、そのうえでネットワークに様々な自己中心ego-centric的な特性を見出すのである。このように私が言うのは、ネットワークはそもそも自己中心ego-centric的なものだ」と述べるのはまったく異なる。ネットワークが自己中心ego-centricであるのではない（Barss 1969: 88）と書いている。ではここで社会的ネットワークの自己中心ego-centricの属性と社会組織的特徴との関係、さらにはネットワークと社会集団との関係が問われなければならない。だが私はここで、この点の論議に入っていく前に、個人的選択と社会状況概念とに少しばかり言及しておく必要を感じる。

### 社会的状況と個人の選択

ミツチエルは、ヴァン・ヴェルセンが初めて「状況方法」、換言すれば「拡大事例研究方法 extended-case method」を展開させた中央アフリカのトンガ族研究への緒言において、次のように述べている。「拡大事例研究法は社会の構造に関する論述とともにそれと併行させて用いられなければならない、なぜならばそれは特定の社会構造の枠組のなかで個人がどのように選択を実施するか、その在り方を本来的に扱っているからである。」（Mitchell 1964: xi）  
この発言は、個人の「二者択一オルタナティブ」あるいは「少数限定的」選択

に関するレイモンド・ファースの理論的立場に極めて近接している。個人的選択の問題はファースの理論の中核に位置し、彼が先駆的問題提起をしている。事実ミツチエルも、またバーンズもこの点に関するファースへの理論的負目を時折告白している。

ファースは、おそらくそのマラヤ等のいくつかの現代複合社会における長い現地調査体験がその契機となつて、個人的選択と社会的変異ヴァリエーションを組織的にその理論の中核に取り込んだ枠組を展開させていた。これらの側面は多くの場合構造機能アプローチにおいてはその考察から排除され、無視されてきていた。ファースの概念的枠組においては「社会構造」と「社会組織 social organization」とは概念上その差異は力点のおき方のうえでの差異であるとされる。ファースは「それらは同一の研究素材を観照するうえでの異なつたやり方を表現している、つまりこの二つは相互補完的な概念なのであつて相対立するものではない。手短かに、かつ大雑把に言つてしまえばこれら二つのうちの一方は社会生活の形式を、他方は過程をそれぞれ表現していると言つても差しつかえあるまい」と述べている（Firth 1954: 4）。ファースにとっては構造はモデルであり、組織は「現実体リアリティーズ」である。構造は持続性と静的側面に力点を置いた概念であり、それに反して組織は過程、変化、ダイナミックな側面に力点を置いている。構造概念は変異をほとんど無視して理念型として抽象する方法であり、組織概念は変異の在り方を見極め、それを取り込んだ現実の行為態、現象態に直接関わる方法である。二者択一オルタナティブの選択、変異、社会変動の間の関係についてファースは次のように述



べている。

「変異性<sup>ヴァリエーション</sup>に向かわしめるのは二者択一<sup>オルタナティブ</sup>の可能性である。人は意識的にが無意識のうちににかにかかわらずどちらの方向へ向かうかを  
選択している。そしてその決断がその後の構造的な配列の在り方を左右していく。社会構造の視角には社会の持続性原理が顕われ、社会組織の視角には変異・選択原理が、すなわち状況評価と個人的選択の介入を許すことによって顕われてくるのである。」  
(Firth 1961: 40)

このようにしてファースによって変異と個人的選択という要因が人類学理論の中核に取入れられるようになったのである。ファースが主張するように「構造が人の行為のための枠組を準備する」(Firth 1961: 40)のであるから、個人的選択は通常構造的に秩序化され用意された少数の選択肢<sup>オプション</sup>ないしは二者択一の範疇内でのみ開かれているのである。変異と選択が構造的枠組の限定内でのみ実現され、あるいは稀にのみその枠組外でも実施されている限りでは、社会変化はいまだ顕著なものには到っていない。「そのような在り方〔変異と選択〕が構造から逸脱し、その逸脱が常態となったときに社会変動の一形態が発生しているのである。」(Firth 1961: 40) 社会的環境が構造的要因の新しい組合わせを用意しているために二者択一的選択が人々に開かれていることになる。

ミッチェルはそのネットワーク研究のもつとも意欲的で重要な編著をマックス・グラックマンに捧げ、彼を「われわれのネットワークの点光源<sup>ポイントソース</sup>」と呼んだ(Mitchell 1969a)。ここが言うネットワーク

はミッチェルを中核にして織りなすネットワーク研究人類学者達の人的関係を指している。点光源はもとより新しい発想と刺激の発信源を意味している。アフリカ研究を素材として逸早く都市人類学研究、植民地体制研究、ネットワーク研究法を展開していたのは後になつてマンチェスター学派と呼ばれるようになった人類学者の一群であつたが、その創始者で師匠株であつたマックス・グラックマンは「社会状況」という研究枠組を早くから提唱していたネットワーク・アプローチの基礎固めを実施していた。ここでミッチェルも言い、後に他の研究者も証言しているように、マンチェスター学派と呼ばれる人脈は正確に評するならば「集団」ではなく「ネットワーク」であつたと言われる。その中核にグラックマンがいた。

グラックマンが一九四〇年代初期から展開していた状況分析は構造分析とは大変異質なもので、それがネットワーク研究法の発生に大きな動因を与えた。グラックマンのアフリカ研究の論旨の中核にはまず個人はその関心、利害、価値、動機にしたがつて種々の集団に属している、その集団への成員権<sup>メンバーシップ</sup>は彼等の利害や関心が移れば、変る。複数の社会集団への重複する成員としての帰属はある特定の社会的状況において異質な規範や役割の間に葛藤を生じさせやすい。「ミニミニ<sup>ミニミニ</sup>の社会構造、社会構造の各構成部分、自然環境およびミニミニ成員の生理的生活の間には常にそれらの相互の関係の底流に横たわる体系」があり、それらの関係のその時々特定の組合わせがある特定の社会的状況を現出させるのである (Gluckman 1940: 10; 1958: 9)。個人は異なるそれぞれの社会的状況

に直面して自己に内在する異なる複数の諸規範間の葛藤を体験し、それに基いて異なる行為を繰り出すのである。

これをグラックマン自身の言葉で見てみよう。

「異った状況のもとでは集団の成員権も変化するということは構造が機能していることを示している、<sup>メンバーシップ</sup>といつのはある特定の状況下にある特定集団所属のある個人の成員権はその状況下にある彼に影響を及ぼしている動機や価値によって決定されるからである。こうして各個々人は相互に矛盾しあう価値やよく調和のとれていない信仰、さらには多種多様な利害や手段の入り混ったこった煮のなかから状況に合った選択をすることによって一貫した着実な生活を生きることができるのである。」(Gluckman 1940: 29; 1958: 26)

これをグラックマンはいくつかの具体的事例をもって示している。その一つを見よう。

「マトラナは政府の警官に対してズル王子への敬礼をし、それから自分が政府から受けている待遇がとても悪いのだとその警官が政府の代表でもあるかのように不満を述べた。マトラナは政府に対しては泥棒を逮捕するのにずいぶん協力をした。一方彼は、ズル族の人々の牛が浸水で難儀しているんだと畜産局担当官に対して同じ部族民のために抗議をしてやった。また彼はズル王の摂政からの頼みを受けて役に立つことができるだけの権力をもつことに満足の意を表しながら、一方では政府や摂政の下で担う政治的地位を退いて自分のための仕事に精を出した方がどれほど収益

が増すか分らないのだと判断していた。」(Gluckman 1940: 27; 1958: 24)

マトラナはズル人でズル王の地区代表でもあり、またイギリス植民政府の役人でもあった。例えば泥棒の捜索に自分の私兵を幾人も投入したが、政府は費用を払ってくれない。マトラナの敬礼した警官はやはり政府の役人で彼の部下だが、ズル王家の一員でもあるので彼は「王子に対する敬礼」をしたのである。すなわち状況によってはズル人として王子に対したり、上司として部下に対する態度を取る。英人担当官に対してズル族のための陳情をしたり、役人として政府の通達を部族民に申し渡したり、泥棒を逮捕したりする。

このようにグラックマンは個人の内部における対立葛藤する規範と役割、人間関係を提示し、それらの結果状況的選択によって個人が様々な多様な行動を採ることを記述して見せた。これは一九四〇年初出のズル族調査に基く研究報告で、その後多くの論文で執拗に個人の内部における対立矛盾する役割葛藤、状況選択、人間関係の操作、家族内矛盾とその外界との関係を論じて周囲の若手研究者や学生に大きな刺激を与えつづけて、ネットワーク研究への理論的基礎づくりをしていた。

ただここで忘れずに付言しておかなければならないことは、社会的状況概念の構想はその端緒においてはエヴァンス・プリチャードのアザンデ族の呪術研究から大きな示唆を受けている事実である。呪術の信念体系が調和のよくとれた、斉合性のある、矛盾のない形で統合されてはいないので、呪師が状況にもっとも適合した個別の

観念を恣意的に操作活用する在り方をエヴァンス＝プリチャードは的確に記述した (Evans-Pritchard 1937: 540) のであるが、彼はその後この方向への理論的枠組の展開を示さず、均衡と美しい統合の構造機能分析に集中して行つた。グラックマンはその師から状況概念を吸収してそれを自らの研究枠組の中核に据え、皮肉にもエヴァンス＝プリチャードの人類学と正面から対立するような議論を孕んだ方向へ向かつて行つた。

### 構造的規制とネットワーク

少くとも人類学におけるネットワーク論者の「第一世代」では、<sup>「ゴレタ・アクト」</sup>論旨の力点が協働集団における統合、規範、合意といった面よりは、自己中心的な人間関係群の在り方に集中していたように思われる。確かにネットワークのもつ構造と統合の面への関心も強かったがネットワークはまず第一義的に諸個人を結ぶ線として眺められ、またこれらの線の集積・集中の在り方が議論されていた。

以下に幾人かの論者の個人と統合の関係についての発言を見てみよう。

エリザベス・ボット「一人の個人は多数の個々の人々と関係をもっているのであつて、このことは、それら他の人々との間の諸関係が形成している範型<sup>パイン</sup>と関係をもっていることより重要である。」 (Bott 1957: 59)

バーンズ「ネットワークの基本的特質を言えば、そこには長もあらず〔中略〕、中心もなく、境界もないことである。それは協働

的な団体ではなく、むしろ社会関係のシステムであり、その関係をとおして多くの人々は様々な活動を実行するのだが、それらの活動は間接的にしか相互に影響し合わない。」 (Barnes 1954: 4849) 同じくバーンズ「おそらく我々は全体ネットワーク内のこれらの諸関係を《個人的<sup>パーソナル</sup>》なものと見ていいだろう、つまりこれらの関係はいずれかの集団に所属する成員権から派生してくるというよりも、ある個人の友人としての、あるいは保護者としての、その他類似の地位<sup>ステータス</sup>に帰因するものである。」 (Barnes 1960: 74)

ミツチエル「これらの研究の関心はネットワークに関わっている人々の属性にはなく、むしろその関係し合っている人々の結合の仕方の特質に向けられるが、それがネットワークに参画する人々の行動を説明する鍵となるのである。」 (Mitchell 1960: 4)

ヴァン・ヴェルセン「私が三年間の調査を済ませてトンガの地を離れたとき、彼等の社会的政治的体系の主要な全体図は私の頭のなかにあつた。だが、そこには確かに秩序が存在するのだが多様な多くの小集団のごつた返しのなかでそれぞれの対立する利害があり、明らかに統一を欠いていて、私はそこに統合を促す要因らしきものを見出すことはできなかった。もっと俗な言い方をすれば、あれほどのてんやわんやのなかでどんな仕掛けが裏にあつてこの社会が動かされているのか判断が難しかった。〔中略〕各個人はそれぞれの個人的なネットワークの網の目のなかにあつて、ある時はこちらの一組の利害関係のなかで立ち回っているかと思えば、次には別の利害関係のなかで動いているといった具合だつ

た。<sup>1</sup> (van Velsen 1964: xxii)

ネットワーク・アプローチがいかに構造的枠組を採り込むことに苦慮してはいても、その議論の焦点は「組織志向型」あるいは「システム志向型」行動にあるよりは「行為者中心志向型」の行為、行為者個人の主体的状況判断とそれに基づく決断、選択、操作、結果の評価、フィードバックといった、主観的に意味の付与された形での行為にあつたのではないかと考えられる。この時点での人類学者によるネットワーク論においては、個人は何よりもまず本来的に人間関係の発動者、操作者として捉えられていた。個人は何かある社会的組織や集団の一部であつたり成員であつたりする以上に、個人的な行為主体であつた。彼は限られた人間関係の資源のなかから自らの関心と利害に基いて個人間関係インターパーソナルの形で連繫を築いてそれを操作して生きるものであつた。関係を創出し、それを破棄し、あるいは作り変え、一時的に停止させ、一言で言えば操作する。つまり個人は構造的に与えられた役割を遂行・実演する者として第一義的に観念されたものではなかつた。人は何よりもまず個人、他の人々とネットワークで連結した、非孤立的個人である。

しかしながらネットワーク研究者のほとんどはこのような視角を一般理論として展開し、すべての人間社会の理論に読み替えていくことに極めて消極的であつたと言わなければならない。このような視角は現代産業社会や「非構造化社会」、急激な変化を経ている社会、都市や多民族社会では妥当だが、例えばアフリカの部族社会では必ずしもそうではないとする。あるいは部族社会については一切

言及しない。

ネットワーク分析に関する国際シンポジウムを主宰したボイス・インはその報告書の緒言で次のように述べた。

「人類学者達が用いる構造機能枠組は、変化の遅い部族的、より単純な社会の研究を主要な足場として構築されてきたもので、欧米世界および第三世界の両者における急激に変動する複合社会の研究を扱うには不適当である。変動概念は均衡、相互補完的対立、既存秩序の持続性といった構造機能主義の基本的な大前提と矛盾する。事実、構造機能分析は未開社会研究にとつても本当に有効な研究装置であるのかどうか、という設問を提出するのは誠に正當なことである。ミッチェルは、先きにシュリニバスとベテル（一九六四年）も主張したごとく、有効だという判断を示した。実際この問題はライデン会議でも取り上げられ、活発な議論は出たが結論は出ずに終った議題となつた。」(Boissevain 1973: vii-viii)

ミッチェルは右の論において、ネットワークと協働集団「コオペラティブグループ」（又は制度）とを対立・矛盾するとするのは誤れる二分法である、エヴァン・スプリチャードのヌアー族に関する構造機能分析は妥当である、社会体系の複合性と単純性の区別が根本であると論じた（Mitchell 1973: 34）。本稿の冒頭で述べたように、部族（単純）社会と複合社会の差は本質的に無国家社会と国家社会の差だと私は考えるが、構造分析やネットワーク研究がどの種の社会で有効であるかは別の論議だろう。部族社会と複合社会とを異質なものとして区別するのはいいが、両者をひとつとして捉え、「ホモ・サピエンス・

「コミュニティ」として観照し、その解釈枠組構築をネットワーク論や構造機能分析との関連で考察することもできるはずだし、肝要だと考える。すくなくとも一九六〇年代のネットワークと構造、集団の議論ではそれらに関する問題提起と理論的総合への試行錯誤がなかったわけではない。総合と一般理論化への試みが必要だが、良い方向へ大きな展開を示したとは言えそうもない。

少くとも次のことは言えるだろう。一方で、ある種の境界のない社会的ネットワークがすべてのより単純な、部族社会にも存在していること、他方である種の境界と成員権をもった社会的集団がすべての複合社会にも存在すること。これらを真正面から否定するものはあるまい。ミツチエル、バーンズ、ボット、ヴァン・ヴェルセン達も時には部族社会における、あるいはすべての人間社会におけるネットワークについて言及することもある。

ボットは「ユークラティディネス連結性」という概念を導入した。それはあるワン・セットのネットワークに関わる人々がどの程度相互に知人であり、どの程度直接に相互作用を実行しているかを示すものである (Bot 1964: 103, 1967: 58-61)。ボットは連結性が高く、多くの人々が密に相互作用を営むネットワークを close-knit network、その逆を loose-knit network と呼んだ。彼女は、欧米社会では共同体に代って次第にネットワークとなるのが全体の趨勢であると述べた (Bot 1964: 103, 1967: 58-61)。これは緊密なネットワークは部族社会で、粗目のネットワークは欧米社会で特徴的だの意味である。つ。「典型的な」共同体ではネットワークは不在だと言ったわけではない。

同様にバーンズはネットワークの「密度」ないしは「網目」について触れている。

「因みに言えば単純で、未開な、農村の、小規模社会と現代の、文明化した、都市ないしは大衆社会とを較べるならば、前者では社会的ネットワークの網の目は密で、後者では大きいのが主要な形式的差異の一つである。網目とは単純にネットワークの孔の周りの空き間をいう。一般に現代社会では小規模社会とは対照的に、人々は共通の友人というものをあまり多くもたないのである。」 (Barnes 1969: 4)

私の考えでは、緊密な、あるいは粗目のネットワークとか、密度や網目といったやや客観性のある尺度でネットワークを計量するといった概念化の方法では人間社会の本質理解、あるいは部族社会と複合社会との基本的な差の解釈もあまり進展しないだろう。ミツチエルもそのネットワーク理論の主論文で意欲的に概念化を試み、方向性、集中性、持続性、範囲、投錨地等々数々のネットワーク形態学的範疇を導入したが、どれもあまりに抽象的にすぎ、論は何の進展をもみなかったと言ってもいい (Mitchell 1969b)。大量の新概念の突然の発明は理論化へのあせりとあがきの試行錯誤としか言えない。ネットワーク論と構造機能分析の架橋に固執しすぎた観が強い。

またミツチエルはネットワーク結合の様態に関し、グラックマンの「ユニフレクティブ単一関係性」と「マルチフレクティブ多重関係性」という理念に倣い、「シングル単一的関係」と「マルチ多重連結的關係」とに分けて、その差を論じた (Mitchell 1969b: 22)

「大規模社会の特質のひとつはそこには無数の単一連結的關係があることである。これらの社会における制度的統合の相対的脆弱さは多重連結的關係の相対的欠除と直接に関連している。というのは、大規模産業社会の共同体においては人々が多種多様な社会活動の場でお互い同じ人々と頻繁に出会うという環境が極めて少ないからである。そのためある生活局面での彼等の活動は他の局面での活動からは比較的に隔絶しているのである。ネットワーク用語で言えば、部分ネットワークを構成する多くの連係線は相互に独立していて重ならないのである。」(Mitchell 1969: 48)

これらの論は社会学畑ではタルコット・パーソンズの展開した「無限定性」と「限定性」の概念と近接したものだ、ここではこれ以上それらの関連は論じない。

簡単にまとめると、複合社会では個人は多種多様な地位と役割をもち、それぞれの地位・役割はそれぞれ異なる人に向けられる紐帯と深く連動している。一方より単純な社会では複数の地位・役割をもっているが、それぞれの紐帯は大体同一の人々に向けられていて、みな相互に強く密接に作用し合っている。このアプローチは前の発想よりかなり良いが、社会学的方法に接近しているともいえる。しかしわれわれがもっとも関心をもち、必要としているのは個人と集団(組織)との連繋の在り方の理論的枠組である。かつそれはすべての人間社会におけるその連繋の在り方を解釈できる理論的概念枠組である。しかしこれは少々欲張りすぎかもしれない。そうかもしれないが、その要請は至上命令である。一方には構造的規制を受け、

構造的に提供されうる数少ない資源としての諸關係から状況に適合したものを選択採用して操作する、關係の発動者・操作者としての個人があり、他方には構造的規制を何等かの形で発動させる集団または組織(境界のあるもの、ないもの、弱いもの、インフォーマルなものも含めて)がある。このことはすべての人間社会について言える。いかなる「境界のない」「自己中心的」ネットワークでも構造的規制から完全に自由なものはない。交換理論の枠組からネットワーク分析をするのはまた別の発想でもあるが、そこでも構造的規制は多様に関わるし、私は金融取引のような形で社会的ネットワークを研究はしない。

アドリアン・マイヤーは「擬似集団」と「自己中心的行為群」(この後者はネットワーク理念に近似している)という概念を導入して、彼もまた「組織化された集団の欠落している状況下」の分析また擬似集団が組織化された集団として析出する過程の分析に役立つとした(Mayer 1966: 119)。これは過程を吟味するには有効である。だがここでも個人と集団との二分分裂の問題は未解決のままである。

アメリカの人類学者のなかには「組織中心志向的ネットワーク」の概念化を試みるものもある。ネットワーク研究の第二世代とも言えよう(ベフ・ハルミ、フィリップ・スタンフォード他)。これらについては本稿では特に触れないこととする。

しかしボットにわずかも言及せずにここを終るわけにはいかない。ネットワークと組織をもっとも雄弁に関連づけて研究したのは

ボットで、彼女の論が出発点だとも言える。バーンズが「自己中心的ネットワーク」を強力に前面に打ち出して論を展開したのに反して、ボットは「家族中心的ネットワーク」および夫婦軸を要とし、それを中心として発動される「接合ネットワーク」の論を大変緻密に実施された現地調査（ロンドンの都市中産階級家族）の報告として提出した。家族から外部へ繰り出される各家族員のネットワークは集団（組織）としての家族の内部における差異化された地位と役割（夫と妻、親と子等）の強い規制を受け、それとの関連で夫のネットワーク、妻のネットワーク、子のネットワークは夫婦軸、親子軸を発進地として別々の方向へ繰り出されて行き、それらは家族という集団と個人としての家族員の健全な生活と生活向上のために操作・活用され家族内の矛盾・葛藤を増長もする（Bot 1957）。

ボットの研究が公刊されるとグラックマンは雀躍<sup>こおど</sup>りして喜びと同時に、自分の直接の弟子のなかからこの研究が出て来たのではなかったことを大変口惜しがった（Gluckman 1971: xiv）。グラックマンはこのことをボットの本の第二版緒言の冒頭に赤裸様に書いている。ボットは彼の教え子ではなかったが、早くから連携をもち、マンチェスターの研究会にも出ていた。バーンズもミッチェルもヴァン・ヴェルセンもみなグラックマンの弟子で、みなネットワーク研究を試み、都市人類学を推進し、社会状況概念を共有し、マンチェスター学派の中心人物達である。かつみな構造機能主義者達でもあった。ボットもこの学派の強い影響下にあったことは確かで、グラックマンの著書から発想を組み、バーンズがネットワーク論を出し

たから、ボットは自分の研究を組み立てた。グラックマンはボットの研究を「社会人類学が産み出したもつとも啓発的な分析のひとつ」とだと絶賛した。ボットは、家族内の役割と葛藤に根差し、その規制下に外部へ関係が繰り出されることをグラックマンの一九五六年の著書から学んだと第二版で明記している（Bot 1957: 248-276）。ボットは確かにひとつの解答を出した。しかも輝しい明晰さでそれを示した。しかしそれでもわれわれの餓え<sup>かつ</sup>が癒えたわけではない。ボットのネットワーク研究はある意味では典型的な社会学的研究であり、構造機能分析のひとつの在り方である。だからこそグラックマンもマンチェスター学派の人類学者達も喜び、一九五〇年代、六〇年代の彼等にボットの枠組は行く手を照らす指針とも受取られただろう。だが、そこからは必ずしも輝かしい突破口が開かれたわけではない。ボット自身一九五七年以降七〇年までのネットワーク研究を総括したうえで、結論として「社会的ネットワークの理念のなかには革命的なものは何一つなかった」と述べ、ただ概念装置は拡大し、一九五四年以前には誰も目をくれなかったものが今は皆に見えるようになったと書いた（Bot 1971b: 330）。

### おわりに

私自身、ラテンアメリカの都市人類学的研究を志し、一九六九、七〇年の頃にはネットワーク研究もある程度読んで期待するところもあり、小さなペーパーを書いたこともある（Maeyama 1971a）。レヴィ・ストロースの構造主義、ターナー流の象徴人類学が大流行

して博士課程の人類学学生の九割近くがその潮流に合流して行った頃、私はそれらの研究から大きな刺激を受け、多くを学びはしたが、構造主義者にもならず、儀礼研究もしなかった。エスニシティ、ネットワーク、任意結社等の集団、パトロネージに焦点を据えた都市人類学に関する学位論文のための調査計画書を一九七一年に書き(Maeyana 1971b)、それによって米国の国立科学財団とコーネル大学から助成金を受けてブラジルでフィールドワークを実施したが、現場での資料との対話のなかでネットワーク研究法自体は次第に魅力が薄れ、学位論文のなかではマイナーな扱いとなってしまうた(Maeyana 1975)。

人間はあまりにも自由で、恣意的で、かつ多様である。自然科学に範をおいた客観主義的モデルでは捉えがたい。同時に人間は構造的に強力に規制されている。単一の単純化されたモデルにはなかなか入りきらない。本論は社会人類学におけるネットワーク・アプローチに関する「マンチエスター学派中心ネットワーク」の構図を描いたものである。少くともその一断面を描く試みである。グラックマンは研究上多くの誤謬を犯した(ベネディクトやレッドフィールドと同様に)が、常に発想の巨大な発信源でありつづけ、マンチエスター学派の真の「ゲル(頭目)」であった。この研究者ネットワークは境界も成員権もなく、国境を越えて世界を駆け巡った。それはザンビア、マンチエスターから伸び、ニューヨークの一学徒にも届き、変質もし、他の学派のネットワークにも連結した。「グラックマン中心的ネットワーク」か、「マンチエスター学派中心的ネ

ットワーク」か、それとも前山の自己中心的ネットワークか、それが問題である。機会をつくって続きも書かねばなるまい。

## 注

(1) 他に適当な訳語が見当たらないので、暫定的にこの語を用いる。「団体的集団」という訳もあるが、苦しまぎれの感がある。

## 参考文献

- Barnes, J. A.  
1964 "Class and Committees in a Norwegian Island Parish," *Human Relations*, 7:1, pp.39-58.  
1962 "African Models in the New Guinea Highlands," *Man*, 62, pp.5-9.  
1969 "Networks and Political Process," In, J. Clyde Mitchell (ed.) *Social Networks in Urban Situations*, Manchester: Manchester University Press, pp.51-76.  
1972 *Social Networks*, Reading, Mass.: Addison-Wesley Publishing Company.  
Boissevain, Jeremy  
1968 "The Place of Nongroups in the Social Sciences," *Man*, n.s., 3, pp.542-556.  
1973 "Preface," In, J. Boissevain & J. C. Mitchell (eds.) *Network Analysis: Studies in Human Interaction*, The Hague: Mouton, pp.vii-xiii.  
Boissevain, Jeremy & J. Clyde Mitchell (eds.)  
1973 *Network Analysis*, *Ibidem*.  
Bott, Elizabeth  
1965 "Urban Families: Conjugal Roles and Social Networks," *Human Relations*, 8, pp.345-384.  
1967 *Family and Social Network*, London: Tavistock Publications.  
1964 "Family, Kinship and Marriage," In, Mary Douglas et al (eds.) *Man*



*in Society: Pattern of Human Organization*, London: Macdonald, pp.82-103.

1971a *Family and Social Network*, 2nd ed., New York: The Free Press.

1971b "Reconsiderations," In, *Family and Social Network, Ibidem*, pp.248-343.

Evans-Pritchard, E. E.

1937 *Witchcraft, Oracles and Magic among the Azande*, Oxford: Oxford University Press.

1940 *The Nuer*, N. York & London: Oxford University Press.

Firth, Raymond

1954 "Social Organization and Social Change," *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, 84, pp.1-20.

1961 *Elements of Social Organization*, 3rd ed. Boston: Beacon Press.

Garbett, G. Kingsley

1970 "The Analysis of Social Situations," *Man*, n.s., 5: 2, pp.214-27.

Gluckman, Max

1940 "Analysis of a Social Situation in Zululand," *Bantu Studies*, 14: 1, pp.1-30.

1956 *Custom and Conflict in Africa*, Oxford: Basil Blackwell.

1958 *Analysis of a Social Situation in Modern Zululand*, Manchester: Manchester University Press for Rhodes-Livingstone Institute.

1961 "Anthropological Problems Arising from the African Industrial Revolution," In, Aidan Southall (ed.) *Social Change in Modern Africa*, London: Oxford University Press, pp.67-82.

1971 "Preface," Elizabeth Bott, *Family and Social Network*, op. cit., pp.xiii-xxx.

Maeyama, Takashi

1971a *Man as Manipulator of Relationships: Network Approach in Social Anthropology*, MS.

1971b *Networks, Groups, and Patronage in Urban Brazil: Research Proposal*, Submitted to the National Science Foundation, mimeographed.

1975 *Familialization of the Unfamiliar World: The Familia Networks and Groups in a Brazilian City*, Ithaca, N.Y.: Cornell University, Latin American Studies Program Dissertation Series, No.59.

Mayer, Adrian C.

1966 "The Significance of Quasi-Groups in the Study of Complex Societies," In, Michael Banton (ed.) *The Social Anthropology of Complex Societies*, London: Tavistock Publications, pp.97-122.

Mitchell, J. Clyde

1964 "Forword," In, J. van Velsen, *The Politics of Kinship: A Study in Social Manipulation among the Lakeside Tonga*, Manchester: Manchester University Press, pp.v-xiv.

1966 "Theoretical Orientations In African Urban Studies: Methodological Approaches," In, Michael Banton (ed.) op. cit., pp.37-68.

Mitchell, J. Clyde (ed.)

1969a *Social Networks in Urban Situations*, Manchester: Manchester University Press.

1969b "The Concept and Use of Social Networks," In, J. C. Mitchell (ed.) op. cit., pp.1-50.

1973 "Networks, Norms and Institutions," In, J. Boissevain & J. C. Mitchell (eds.), op. cit., pp.15-35.

Srinivas, M. N. & Andre Betelle

1964 "Networks in Indian Social Structure," *Man*, 64, pp.165-168.

van Velsen, J.

1964 *The Politics of Kinship*, op. cit.

1967 "The Extended-case Method and Situational Analysis," In, A. L. Epstein (ed.), *The Craft of Social Anthropology*, London: Tavistock Publications, pp.129-149.

Whitten, Norman E., Jr. & Alvin W. Wolfe

1973 "Network Analysis," In, John J. Honigsmann (ed.) *Handbook of Social and Cultural Anthropology*, Chicago: Rand McNally College Publishing Company, pp.717-746.

( | | ○ ○ | 井 | ○ 田 | | ○ 田 敬 典 )